

## 芥川龍之介における「近代」

——『開化の殺人』『開化の良人』を読んで——

菊 地 弘

大正五年に書かれたとされる『明治』という未定稿作品がある。

開化のもたらした一切のものが珍らしいとされた時期を描いている。文明開化期の没落した商人の家で、二人の娘の雛を売ることになり、手つけ金を受け取り、道具屋が雛を引きとりに来るのを待つだけとなった夜中に、雛への愛着を口にした妹娘が、雛をとり出して眺めている父の姿を見、二度とお雛様を見たいと言ひまいと誓ったという筋で、のちの小説『雛』の原型となった作品である。兄妹が姉妹になっているなど違いがあるが、(ランブ)、(人力車)、母の面疔、登場人物の一人が狂うなど共通点も多い。斜陽の家で雛に象徴される伝統美を描くことが主眼であったわけであろうが、点景のような挿話がある。それは姉娘が父に語る話である。なが年アメリカでコックをしていた男の話である。築地の異人館に勤めているらしいその男には妻と子供が二人いる。アメリカに(女唐)がいて、不意にこの男の家へやって来た。ところが男には妻子がいるの

で(女唐)は約束までしたのに騙されたといつて、逆上して井戸の中へ身を投げた。が幸い長屋の人びとに助けられ、女は気違いのよう泣いているそうだ。異人だつてあんまり可哀さうですという。父はそのような娘の話には気のなさそうな声を出したというだけのことである。こうした類の話は開化期には多く巷談にあつたろうが、そうした「東」と「西」の揺蕩混在している開化期に、この時期芥川が眼を向けていたことは確かである。開化政策にどれほどの確かな眼と思想をもっていたかは計り難い。しかし大川の周辺の町や家に遺る江戸的な情調に诗情を寄せる心と、新思潮によって日本のなかに位置を占めてゆく西洋にも想いをいだき詩的感覚を所有する心と、そのような二極を持ち込んでいたということが窺える。それが大正七、八年頃から「現代もの」へと移り、リアリティを深化させるうちに、開化の新時代を主題や題材に選び、日本のなかの「近代」を描くことになってきたといえるのではないかと思う。

大正七年七月「中央公論」増刊「秘密と開放号」に「芸術的探偵小説」と称して、谷崎潤一郎『二人の芸術家の話』佐藤春夫『指紋』、里見弴『刑事の家』と並んで芥川の『開化の殺人』が掲載された。初めは「中央公論」に発表の予定ではなかった。即ち松岡譲宛書簡(大正6・11・24)に「へこんど新小説へ「開化の殺人」と云ふものを書く、一種の探偵小説じみたものだ」といい、また薄田淳介宛書簡(大正6・12・8)では「へ題は「開化の殺人」としておいで下さい或は「踏絵」と云ふのになるかも知れませんが」とあるように、「新小説」か「大阪毎日新聞」に載せる予定であったのが、八ヶ月後の翌年七月に「中央公論」に発表したという経緯がたどられる。

この作品は初出では冒頭へ本多子爵閣下、並に夫人とある遺書の形式となっていて、終末にへ追白、この遺書の書かれた当時は、まだ爵位の制が定められてゐなかつた。茲に子爵と云ふのは、本多家の後年の称に従ふのである。とある。ところが「傀儡師」(大正8・11・15、新潮社)に収録の際、へ追白、…の部分削除され、本文の前に前書が加えられて、本多家から遺書を借覧してへ改竄を施して発表するという体裁に改められた。改稿を促したものに「三田文学」(大正7・9)の「六号余録」で「芥川氏の「開化の殺人」の最後に「この時代にはまだ爵位の制定がなかつた、この作はたゞ便宜上爵位を附けて置いた」といふ意味の断りがしてあるなどは、寧ろ氏の「キズの少なさ」の慌しさを暴露した悲喜劇だ。作者が態々断らなければ、大抵の読者は気が附かぬのに、これでは少

し藪蛇だ。それに第一氏の慌てさ加減が見えて見つともない。」の批評があつて、手直しされたと思える。つまり、遺書に当時なかつた爵位による呼称を用いたという誤りがあつたということである。

前書に、この遺書を書いたへ故ドクトル・北島義一郎は「當時内科の専門医として有名だつたと共に、演劇改良に関しても、或急進的意見を持つてゐた」という。いわゆる文明開化期に西欧の新知識を得て時代に即応して活躍する人間と窺える。そうした知識を所有し活躍した人物に相応しく「英吉利風の頬髯を蓄へた、容貌魁偉な」風貌を具え、体格も西洋人を凌ぐ、「精力技痒」の身体の持ち主であつたことが描かれている。

本多子爵と夫人にあつた遺書という形式で、一部日記も引用して北島義一郎の心のうちが描かれる。即ちへ既往三年来、常に子が胸底に蟠れる、呪ふ可き秘密を告白し、以て卿等の前に子が醜悪なる心事を曝露せんとす。と告白がされる。過去において殺人罪を犯し、将来もまた犯す危険人物であるといい、しかしへ子が告白は徹頭徹尾事実であるという。そしてへ呪ふ可き秘密を告白する力が与えられることをへ子が数年来失却したる我耶蘇基督に祈つてゐる。

北島は十六歳の少年の頃から明子を愛したという。藤棚の下にへ凝然として彫塑の如く立つ明子の姿が心に深く刻まれ、へ念々に彼女を想ひて、殆学を廃するに至つたくらい、愛心に悩まされたという。しかし二十一歳に達したとき、突然父より家業の医学を継ぐためへ竜動に留学を命じられ、へ無限の離愁を抱いて英国

へ向つたという。へ儒教主義の教育を受けたる予も、亦桑間濮上の譏を懼れ、て、明子への燃える心熱を積極的に表せなかつたという。受けた儒教的思想が身体に濃く、個の意志の発露に至らなかつたことを示している。それだけに内心では愛の苦悶が増すにつれ明子を純心美化する心を強くしていったことも知られる。

英国留学三年の間、片時も忘れることなく、唯へ紫藤花下なる明子を憶ひ、へベルマルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憫みしか、と、という孤独な生を送る中で、へ来る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶々の情を排したという、浪漫的な純白な心情を吐露している。そうした純白な愛心を心底に秘めたまま打ち明けることのなかつた彼は、帰朝してみると、明子がへ銀行頭取満村恭平の妻となつてゐることを知り、へ失恋の慰藉を神に求めるといふことになる。が、ここで押えておきたいことは、北畠は一度も明子に愛を打ち明けておらず、したがつて明子には北畠の自分に対する愛も、その苦衷をも察知することは出来ない。つまり北畠の片恋いなのである。ところが、北畠は明子が満村の妻となつてゐるのを知るやへ即座に自殺を決心したが、へ怯懦と、留学中帰依したる基督教の信仰により死を思いどまつたという、主観的な浪漫主義者に相即した内的衝動を覗かせてもくるのである。へ儒教主義の教育を受けて育つた北畠がキリスト教に救済を求めたということは、西欧の近代思想の原型に触れてゐたことにもなる。そうなるもタテの儒教的倫理にヨコのキリスト教的他者の認識との二極の観念と感情が混淆してゐることもなつてこよう。北畠はキリ

スト教的な認識を選択し、帰朝後、へ子の失恋の慰藉を神に求め、築地に在任している宣教師を訪ね、神の愛を語り合う。聖書を耽読して精神の高揚に自ら励んだという。宣教師に聖書をひもとかれた北畠は、

予の明子に対する愛が、幾多の悪戦苦闘の後、漸次熱烈にしてしかも静平なる肉親的感情に変化したるは、一に同氏が子の為に積義したる聖書の教章の結果なりき。(傍点菊地)

と語る。明子を愛するこれまでの感情に新たな意義へ肉親的感情を見出し、一応苦悶を超え新生面を拓き得ようとする。しかし内的葛藤を次のように明かすのである。

予が愛の新たな転向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、説明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇氣と余裕とに乏しけれど、予がこの肉親的感情によりて、始めて予が心の創傷を医し得たるの一事は疑ふ可らず。

としながらも、北畠のへ肉親的感情への転心には、心情がおぼめかされて、不自然さが文脈から読みとれるわけである。主観的な浪漫的感情は宣教師の積義した聖書の力で閉じ込められたとも解せるわけである。しかし一応キリスト教の力で無私の広大な感情へ上昇させ肉親的愛情を信じ進んで満村恭平夫妻に接近することを希望するということになるわけである。

ところが、明治十一年八月三日へ両国橋畔の大煙火の折、満村とへ一夕の歡を俱にし、た北畠は、満村のへ濫淫の賤貨に怒を燃やす。明子を妹のように思へと神に教えられた。その明子をへ禽獸

の手)にまかすことは出来ない。〈予は今後断じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し〉と無私の愛情は一変して、神の力を絶ち、〈不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激〉に立つて〈殺害の意志〉から〈殺害の計画〉へと心を高ぶらせてゆくわけである。しかも、激憤が〈水楼煙火を見しの夕に始る事〉という。つまり大川で花火を見物した夕べに始まるという趣向に、野田宇太郎が指摘していたかと思うが、歌舞伎仕立てのシーンを想い起させるものがある。ここで『大川の水』を想い起してもよい。江戸から明治初期にかけて、歌舞伎作者が、浅草寺の鐘とともに、殺し場の情調を力強く表わすのに大川のさびしい水の響を用いたということも連想してもよい。激怒の起点がそこにあるということに、西欧の近代の知に出会っている人間であるにもかかわらず、意外に情念に動かされる一面も覗かせている。そのような情念に動かされる北畠であるから、キリスト教の〈肉親的愛情〉の一念で自己を抑制してゆくことができなかった。もう少し立ちいって言えば、聖書に導かれて無私の愛に転じた感情が自己偽臆であったことがやがて露呈し、神は救いとならず、身体にしみついた情調的感情が優位に立ち、北畠の本然を開示したことになる。北畠は、殺人計画を実行するにあたって、幾多の逡巡を繰り返すうち、年少の友本多子爵と明子とは〈許嫁の約〉が既にあり、〈相愛の情を抱〉いていたことを知り、二人の仲が満村恭平の〈黄金の威に圧せられて、遂に破約の已む無きに至〉ったこともわかる。北畠は満村への激怒とともに本多と明子との〈旧契〉に〈一種名状す可

らざる悲哀を感〉じる複雑微妙な心理に揺れるが、それでも北畠は、予はかの獸心の巨神を殺害するの結果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晚幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自ら口辺の微笑を禁ずる事能はず。

と義を重んじる志士的な氣風に立つて二人のために満村殺害を決心する。こうした北畠の自己の本心(自然)を殺して、本多と明子とを結婚させる手助けを行うことから、想うことは、夏目漱石の『それから』で三千代と平岡とを結婚させる為に動いた代助の義侠心と通じるものがあるということである。北畠の行為は自然な感情からではない、〈紫藤下に立つ〉明子への思いを失ったわけではないから、偽善が伏されているわけであらう。

〈明治十二年六月十二日、独逸皇孫殿下が新富座に於て日本劇を見給ひしの夜〉満村は劇場から家へ帰る途次突如病死する。北畠が満村に〈所持の丸薬の服用を勧誘し〉て殺害したわけだが、ここでも留意しておきたいのは、殺害実行が観劇中に満村に顔色が悪いと話しかけて丸薬を服用させたところである。先の水楼煙火といい、歌舞伎劇の筋にありそうな趣向がそこにも窺えるのである。とにかく満村には〈脳出血の病名が与〉えられ、北畠の殺害は表沙汰にはならず果し得たことになる。だが先に触れたように自然な感情を晦ました、いわば義侠心からであったことから、数ヶ月が経過すると、〈最も憎む可き誘惑と闘ふ可き運命に接近しぬ〉と自然な感情が甦ってくる。依然〈紫藤花下に立ちし当年の少女〉明子の印象が浪漫的に美的に心情に刻印されていて、その愛の苦悶から遁れ

られなかつたわけである。

嗚呼、予は誰の為に満村恭平を殺せしか。本多子爵の為か、明子の為か。抑も亦予自身の為か。こは予も亦答ふる能はざるを如何。

とあるように、実行した行為に反問する形で迷いを示すことにもなっている。そのように彷徨するなかで、満村殺害に用いたへかの丸薬を忘れることが出来ず半ば偶然であるかのようにポケットにしのばせ、本多を意識することになる。本多と明子は結婚する。

予は予自身に対して、名状し難き憤怒を感じざるを得ず。その憤怒たるや、恰も一度遁走せし兵士が、自己の怯懦に対して感ずる羞恥の情に似たるが如し。

という具合に、臆病で意志脆弱な自己を明らかにすると同時に、そういう人間にふさわしく、満村を殺したと同じ手口で、つまり新富座で観劇したのち、北畠は丸薬を服用する。

予は本多子爵を殺さざらんが為に、予自身を殺さざる可らず。されど予にして若し予自身を救はんが為に、本多子爵を殺さんか、予は予が満村恭平を屠りし理由を如何の地に求む可けん。若し又彼を毒殺したる理由にして、予の自覚せざる利己主義に伏在したるものと做さんか、予の人格、予の良心、予の道徳、予の主張は、すべて地を払つて消滅す可し。是素より予の善く忍び得る所にあらず。予は寧ろ、予自身を殺すの、遙に予が精神的破産に勝れるを信ずるものなり。

とあるように、本多を殺すか、自分を殺すかという岐路に立たさ

れ、内なるエゴイズムの実相に直面する。北畠の本心は本多を殺害して明子を求めることであつた。ところが見て来たように自らの死を以て本心を遺書で明子夫妻に伝え、かつ自己のエゴを絶つた。

それは本多と明子が婚約者で相愛の仲であつたという事実の承認であつた。他者の認識、我執の否定を窺うことができる。ここから漱石の『こゝろ』が想い浮かんで来る。漱石ほどの根を掘るような執拗さはないとしても、西洋の知を享けた人間の日本近代社会の中の孤独——生きることの困難さ——を観取することができる。そしてこの場合、キリスト教的な愛の認識に立つた無私の感情が、自己抑止の儒教的倫理と奇妙に結ばれて義侠的な氣質となつて表れたこと、また、演劇改良に積極的であつた北畠が意外に旧弊の歌舞伎に演じられる情調のもとに殺人を犯すことなど、開化という新旧の混在する時代を描いてもいるわけで、そこに芥川の一視点があるといえる。探偵小説らしいミステリーは作品からは殆ど感じられない。

そのように愛心を諦めねばならない心情の危うさを『開化の良人』(大正8・2「中外」)でも扱っている。

この作品は明治初期の版画の展覧会を見ながら、〈私〉がそこで出会つた老年の本多子爵から三浦直樹という子爵の友人の話をきく形式である。

開化期の芸術の一種の調和、江戸とも東京ともつかない和洋折衷の調和は、現代の東京からは失われている、銅版画を見てそんな感想をもつ本多は、次のように〈私〉に語る。

本多子爵は大蘇芳年の浮世絵へ洋服を着た菊五郎と銀杏返し半

四郎とが、火入りの月の下で愁嘆場を出してゐるのを見て明治初期の美しい調和を想い浮かべ、また新聞をひろげてみると、三四十年前の〈鹿鳴館の舞踏会の記事が出てゐさうな気がする〉という郷愁に憑かれている。そして

もう私はあの時代の人間がみんな又生き返つて、我々の眼にこそ見えないが、そこにもこゝにも歩いてゐる。——さうしてその幽霊が時々我々の耳へ口をつけて、そつと昔の話を囁いてくれる。——そんな怪しげな考がどうしても念頭を離れないのです。

と近代都市の様相を整える前の、江戸とも東京ともつかない時代を懐かしみ、その美に憧れを持ち続けているのである。しかも新婦朝者本多は西欧崇拜というよりはむしろ江戸庶民の感覚に西欧の感覚を脈動させているのである。その本多は芳年の描く〈洋服を着た菊五郎〉が友だちに似ているといつて三浦直樹について話すのである。

本多と三浦は洋行帰りに同じ船に乗り合わせて親しくなつたといふ。三浦は芳年の描く菊五郎のようにへ色の白い、細面の、長い髪をまん中から割つた、如何にも明治初期の文明が人間になつたやうな紳士であつて、下谷あたりの大地主の家に生れ、形ばかりは銀行につとめてゐる。大川に臨む邸宅にへ気の利いた西洋風の書斎を新築して読書に耽つてゐる。仏蘭西窓、縁に金を入れた白い天井、モロッコ皮の椅子や長椅子、壁のナポレオン一世の肖像画、彫刻のある黒檀の書棚、大理石の燵爐、その上にへ父親の遺愛の松の

盆栽が置いてある。そういう家構や調度品の光景を

すべてが或古い新しさを感じさせる、陰気な位けばけばしい、もう一つ形容すれば、どこか調子の狂つた楽器の音を思ひ出させる、やはりあの時代らしい書斎でした。

と、新旧文明の混在した空気が漂つてゐると捉えている。その状態は直接時勢の反映であり、一種の新感覚であつた。そうした新旧兼ね備えた家の書斎で、フランスの小説などを読んで日を過している三浦直樹なのであつた。そしてどちらかという、

唯物的な当時の風潮とは正反対に、人一倍純粋な理想的傾向を帯びてゐた……

と、物質文明主義者ではないといふ。その〈理想〉はへ一時代前の政治的夢想家に似通つてゐる所があるといふ。つまり開化の新时代的の空気を呼吸しつつ前時代の体質が残存しているわけだ。二人で〈神風連の狂言〉を見に行つたときに、本多が合理主義的な考え方から神風連の一揆を起した連中を否定したのに対し、三浦は神風連の、へたとひ子供じみた夢ににしても信念に殉じた一凶さに対しい深い同感の意を示すといふ、主観的主情的態度をとつた。三浦は、フランス小説を愛読していることから自然科学的な醒めた認識に立つ人間を一面思つたのだが、実はそうではなく、一念に奉ずる、その限りでは自然で虚飾も虚偽もない情を〈理想〉としてゐることが知り得るわけで、その氣質は情念的といつてもよいものである。その点で『開化の殺人』の北島ドクトルと似通つたタイプなのである。ともに西欧近代社会を見、体験して帰朝した知識人であ

る。その北畠は一瞬の感情で摺んだ明子を絶対的なものとして観じ、心中で慕いつづけた浪漫的 주관性(主観性)の強い人間であったが、この三浦も一途にひとつの深い情を信念にして心熱を燃やす人間を尊いとしているのである。北畠は一旦はキリスト教の神の愛に帰依するがやがて離れ、その行動は歌舞伎劇に見られるような義侠心によるところが大きかったが、三浦も比喩的に大蘇芳年の浮世絵に描かれている、洋服を着た菊五郎のような人間とあって、二作の趣向は深く連繫しているようだ。

三浦は「僕は愛のない結婚はしたくない」と主張して、独身を通してきたが、本多が朝鮮に赴任中、御用商人の娘と縁談が整った」という知らせを受けた。続いて受取った手紙によると、(或日散歩の序にふと柳島の萩寺へ寄つた所が、そこへ丁度彼の屋敷へ出入りする骨重屋が藤井の父子と一しよに語り合せたので、つれ立つて境内を歩いてゐる中に、何時か互に見染めもし見染められもした」といういきさつが認めてあつたという。そこで三浦の結婚を本多は(如何にも風雅な所)で、「才子佳人の奇遇には詠へ向きの舞台」と評してから

しかしあの外出する時は、必巴里仕立ての洋服を着用した、どこまでも開化の紳士を以て任じてゐる三浦にしては、余り見染め方が紋切形……

と、シニカルな捉え方を示しているのである。西欧の近代の知は徹底せず、感覚は風雅で情緒を愛する二極の不調和が予覚されてきている。一年後、本多は帰国し、三浦と会つた折に、早くも三浦に快

活さが失われているのを感じる。それは(潑刺たる才氣)のある三浦勝美夫人のみだらな享楽に耽る生活に由来しているといふのである。

つまり本多によると、友人のドクトルに誘われ(於伝仮名書)を新富座に観に行った折、三浦夫人が棧敷の中ほどにいるのを見たので挨拶をすると、夫人も目礼を返して来たが、それは隣の柵にいる派手な縞の背広を着た男に対するものであることに気付いた。また夫人の隣には(檜山の女権論者)といわれる(檜山と云ふ代言人の細君で、盛に男女同権を主張)している女性が坐っていたという。夫人が会釈した相手の男は、(のち三浦によって妻の従弟であることが知れるが、(姦通の二字)が私の心に烙きついたらと本多は語る。

一方、檜山夫人は(前身は神戸あたりの洋妾だと云ふ事、一時は三遊亭円晝を男妾にしてゐたと云ふ事) (近来はどこかの若い御新造が、檜山夫人の腰巾着) になつていふというやうな醜聞が伝わっている。そうしてさらに三浦の妻の従弟と檜山夫人との情交、三浦夫人にはほかの男から艶書が届くといふ具合に性的享楽が繰り広げられている事実が明らかにされてくる。このような現実のなかで、かかげた理想(愛のある生活)は失望させられていくことになる。そこには文明開化のもたらした男女の解放が思想として浸透しないで、皮相的な感覚で感受され、肉欲的な交情に歪められてしまった現実の様相が描かれていることになる。

本多と三浦は(十六夜)の晩大川に舟を浮かべて語り合う。いまだ大川の夕景色には、(浮世絵じみた美しさが残つてゐる) 詩情漂

うなかで、三浦は妻をへ一週間ばかり前に離縁した」と告白する。  
三浦は

妻と妻の従弟との間に、僕と妻との間よりもつと純粋な愛情があつたら、僕は深く幼馴染の彼等の為に犠牲になつてやる考だつた。

という。へ愛を優先させる生活を主張している三浦の理想からして、妻と従弟とが深い愛に結びついた真実な関係なら、認めようとしている。それは他者を認識することに愛を結びつけた論理で近代の感覚が示されていることになる。そこでは一度は無私の愛に上昇した北島がへあきらめへの気持をおぼめかしていたよりは、開化期の理想主義者に相応しい、ある種の合理主義的な面貌を覗かせているといえよう。しかし開化の妻勝美の男に対する愛も純粋なものではないことを知り、理想のへ愛のある結婚は淫楽の世界に裏切られ粉碎されてしまったということなのである。既に述べたが三浦には主観的で主情性が濃い一面があつた。言い換れば信念を対象化するだけの醒めた眼は持ち合わせていないことなのである。へ余り見染め方が紋切形と本多が批評したように、三浦が愛を基層にした生活を求め、西欧近代の感覚をもちながら、感覚を思想化させるだけの知が養われてはいなかつた。だから本多には三浦の結婚は意外な、旧弊好みと映っていたのである。結婚の通知を読んでへ擦られるやうな心もちを禁ずる事が出来ませんでした」とへ微笑を漂わせる、好意と皮肉の混ざった態度は、意外に情緒的な三浦の感覚を嗅ぎとっていたからであつた。つまり三浦と較べて同じ新婦朝者本

多の方が、新思想を身体的な感覚で捉え、明治初期の開化の美を對象化していたということなのである。

妻の不行跡を知って理想が破壊された三浦は、

「所が僕は又近頃になつて、すっかり開化なるものがいやになつてしまつた。」

という感慨をもらし、その文脈に連なつて、

何時か使に來た何如璋と云ふ支那人は、横浜の宿屋へ泊つて日本人の夜着を見た時に、「是古の寝衣なるもの、此邦に夏周の遺制あるなり」とか何とか、感心したと云ふぢやないか。だから何も旧弊だからつて、一概には莫迦に出来ない。

と、開化についての感慨を明らかにしてきているのである。文明開化を遂行する時流への揶揄と倦む心を覗かせたものになつてきているのである。そして、そうした新時潮に反目する心から伝統的な美や江戸的な情調を首肯する姿勢を表わすことにもなつてしまつているのである。そして考えられることは、開化の思想がもたらした愛を至上とする人間生活が、覗てきたように肉体的性交に歪められてしまつた、そこに当然西欧近代の思想や文化の享受のあり方が現実的具体的問題となつてくるわけである。作品の終末部分でへもの妻いやうに赤い十六夜の月が上り始めたところ。漱石の『それから』の最終章でのへ赤い色を想起させられるのであるが、欠けはじめのへ赤い十六夜の月の不気味さに、開化の新文明が「歪空間」のなかに陥つてゆくやうな、近代の様相の一端を作者芥川は象徴したように思えてもくるのである。



三浦は、かう云ふ月の出を眺めながら、急に長い息を吐くと、さびしい微笑を帯びた声で、「君は昔、神風連が命を賭して争つたものも子供の夢だとけなした事がある。ぢや君の眼から見れば、僕の結婚生活なども——」私「さうだ。やはり子供の夢だつたかも知れない。が、今日我々の目標にしてゐる開化も、百年の後になつて見たら、やはり同じ子供の夢だらうぢやないか。……」

と語るように、開化の変革の意味を正しく感得し難い現実認識を示すとともに、夢と見据える裡に哀し感傷の声を響かせているようにも思えてくるわけである。だが一方、「夢だらうぢやないか」の詠歎的な疑問のうちには、しかし開化の文明を通してしか日本近代の進化はないとする認識も芥川は感得していたらう。それがこのような形で表明されているのではないか。

そうして思い起してみたいのは、『開化の殺人』で、北島が芝居という背景のもとに実行行為を起したように、この作では大蘇芳年の浮世絵をみて、本多は洋服を着た菊五郎から三浦直樹を連想して、開化に敗れた三浦を語る発想があるということである。先に少し触れたように、菊五郎に似た三浦は大川の近くに邸宅を構へ、和洋折衷の、一種へ明治初期の芸術に特有な、美しい調和を示してゐた。当時の版画を思わせるような日常生活であつたわけだが、へこの調和はそれ以来、永久に我々の芸術から失はれた。いや、我々が生活する東京からも失はれた。と本多は追憶する形で現実を歎く。あたかもその時流の変化に沿うかのようにと思つたわけであるが、新

富座に毒婦もののへ於伝仮名書を観劇した折に、三浦夫人と従弟、橋山夫人を本多が見かけたことになっている。つまり際物的な芝居から派生的に連想させられて、三浦のへ愛のある結婚の理想が性愛主義によつて崩れてゆくさまが予感されているように思えるわけである。そしてさらに大川、歌舞伎、浮世絵と江戸的情調の俤を窺えるように構成されているのである。そうして西欧近代の風に吹かれて来た三浦は、すっかり開化なるものがいやになつてしまつたと憤慨しているのである。ということは文明開化について知的な自覚をしなかつたことによる。へ愛のある生活の理想を結局身体的な感覚に陥し入れてしまふことになつたわけであり、大川に舟を浮べて開化の新文明を嘆じる旧い詩情に落ち着くことになつてしまつたのである。そうしてまたそのような詠嘆的な気分はおそらく開化期を反映したものであつたらう。儒教的な秩序の残存する現実で、西欧の主體的で相互的な人間関係は新鮮で好奇心を持って見詰められたであらう。そうした男女の主體的に愛する関係を見て、当代の人間が感覺的に感得してしまつた結果、相互的關係を性愛主義に歪めてしまつた、そういう端的な反映を描いていたということにもなつてくるのであらう。ドクトル北島義一郎が明子に深い思いを秘めているながらへ桑間渚上の讒を懼れ、結局は死によつて真情を伝えるということも、三浦直樹が愛を至上とした生活を信念しながら生活のなかでは成就し得ないということも、旧い秩序や体質の残滓をかかえるなかで相互的な愛の関係という西欧の新思潮に十全な理解をしなかつたことによる。

西歐帰りの本多子爵は（江戸とも東京ともつかない、夜と昼とを一つにしたやうな時代）に対する美的感動を、浮世絵を通して語るが、その本多の話に聞き入っている、作者とおぼしき人物（へ私）は、

この築地居留地の図は、独り銅版画として興味があるばかりでなく、牡丹に唐獅子の絵を描いた相乗の人力車や、硝子取りの芸者の写真が開化を誇り合つた時代を思ひ出させるので、一層懐しみがあがる……

という。明らかに本多の美的感動と追憶に同感し、開化美に惹きつけられているといえよう。そのことは日本のなかに西洋の文明の美を擱んでいるともいえる。芥川は大正三年四月「心の花」に載せた『大川の水』の終末で

大川の水の色、大川の水のひゞきは、我愛する「東京」の色であり、声でなければならぬ。自分は大川あるが故に、「東京」を愛し、「東京」あるが故に、生活を愛するのである。

と心情を表白している。大川に東京を重ねて捉える芥川の場合には、築地の外人居留地とともに（浮世絵じみた美しさが残る）大川とその周辺の文化の盛衰は、日本近代の象徴として映っていたことであろう。おそらく開化は百年後やはり子供じみた夢だろうかという疑問を、芥川は、黎明期の日本の様相に注視し、近代の行方を視座に入れつつ問いつづけている。

『開化の良人』発表の二ヶ月後の大正八年四月「中央公論」に「次号小説予告」として次のような掲載記事がみえる。

本号に掲載する管なりし芥川龍之介、谷崎潤一郎両氏の小説は前者は其実父の逝去せられし為め、後者は次に掲ぐる書簡にあるが如く、著者近来の力作にて締切間に合はざりし為め、二篇とも田中貢太郎氏の新作と共に五月号の誌上にあらはるることとなれり、読者諸君の御諒恕を乞ふ。（編者しるす）

呪はれた戯曲……谷崎潤一郎

南瓜の苗……田中貢太郎

開化時代……芥川龍之介

とあって、瀧田宛の谷崎の書簡が付けられている。『開化時代』の題目で芥川に小説の構想があつたようだ。しかし五月号に谷崎、田中は予告通りの作品を載せたが、芥川は『龍』を発表した。従つて「開化もの」としては大正九年一月『舞踏会』ということになる。

中村真一郎は『開化の殺人』『開化の良人』『舞踏会』を「連環小説」として押えている。<sup>(4)</sup>中村氏と違ふ意味でいえば、（開化も、百年の後になつて見たら、やはり同じ子供（4）の夢だらうぢやないか）の夢は、『舞踏会』の明子が、明治の開化によく似合う開化の美を輝かした生に徹出した、そして三十二年後も舞踏会の夜の美を抒情的感覚のなかに温存しつづけて夢みているなかに引き継がれているようにも思う。

とにかく『開化の殺人』『開化の良人』と迎ってきて、芥川の眼は開化の新文明を、大川、花火、歌舞伎、浮世絵という東のメカニズムと旧い詩情を逆に漂わせながら認識しようとしている。そのようなことは勿論底流に、日本近代のなかで西歐の新思潮の受容と変

容とを問ひ吟味する芥川の観念があるわけである。

△注▽

(1) 同じような素材を探偵小説として書いた『未定稿』と題する未完の作品があり、岩波版全集第三卷(昭和52・10)後記によると大正九年四月に「新小説」に発表されている。また右の『未定稿』の草稿とされるものが同全集第十二巻に収録されている。

(2) 私見とは異なるが、桶谷秀昭氏「芥川と漱石——明治の意味」(昭和56・5「国文学」)で『開化の殺人』と『ころ』との関連にふれている。

(3) この「赤い月」に関して神田由美子氏は「大蘇芳年と近代文学」『月岡芳年の全貌展』昭和52・7・29～8・24 西武美術館)で「この物語の終東部において作者芥川は文明開化なるものに絶望した二人の明治の青年に大川の上に登った『もの凄いやうに赤い十六夜の月』を眺めさせ、その虚無的な赤い月を先に引用した芳年の『火入りの月』に重ね合はせるのである。夜と昼とを一つにしたような『開化』なるものの虚偽を照らすその虚ろな光故に。つまり、芥川は芳年の虚構の『月』に、明治という新政府の欺瞞的シンボルを見たのである。」と書いている。

(4) 「連環小説としての開化物」(名著複刻「芥川龍之介文学館」昭和52・7 日本近代文学館)